

昭和 53 年度
(1978)

巖冬期笠ヶ岳から槍ヶ岳縦走

昭和 53 (1978) 年 12 月 22 日～1 月 2 日

槍ヶ岳の全員登頂。久しぶりに全員で一つの目的ピークを踏んだ。皆で重い荷物を背負い、ラッセルをし、沈殿して……。これは一つの山行形態であるし、他に多くの形式（やり方）があると思う。しかし、個人の特徴を生かす信大方式ともいうべきものが現行であり、現在の部員数と、その個人の好みと合宿と、その兼ね合いは更に難しくなるだろう。

冬山合宿の位置づけ＝信大の山岳会の方向性を示すと思われる。昔の信大とか、現在の山岳会の流行に左右される必要はないと思う。大学という一つの短く、かつ又一个の組織の中で、自分が得る最大最良のものを吸収するよう、また出来るよう努力すべきだと思う。

CL 下田 章

参加メンバー

CL 下田 章 SL 片山博彦
 師田信人 二俣勇司
 食糧・梱包 島谷 寿 石渡健司
 装備 山本雅大 中村康信 田中誠司
 会計 中村康信
 記録・気象 川原 修
 渉外 加藤恒夫
 医療 水谷秀彦

行動概要

12 月 22 日 松本～槍見温泉

12 月 23 日 雪

先発隊 (二俣、片山、加藤、中村)

槍見温泉～クリヤ橋～デポ地点～TS (広サコ尾根 1750m)

後発隊

槍見温泉～クリヤ橋～TS (広サコ尾根 1,750m)

12 月 24 日 雪

ルート工作隊

クリヤの頭まで急登であるが、赤旗もあるし雪は深くない。頭の手前で 3 回のフィックスを実施

した。

デポ回収隊 (田中、加藤、川原、中村)

TS～槍見温泉～C1

12 月 25 日 晴

先発隊 (片山、田中、師田、山本)

雪は昨日の降った量が少ないため、昨日のトレースが残っており歩きやすい。二の沢の頭下りにフィックス 40m + 20m。うすく雪がついた急斜面クラストしている。ところどころにハイ松が出ている。前に関学パーティーがいるためラッセルはない。

後発隊 (下田、二俣、加藤、島谷、水谷、石渡、

中村、川原)

C1 ~クリヤの頭~二の沢のピーク C2

12月26日 晴

先発隊 (下田、二俣、加藤、川原)

C2 ~笠ヶ岳~ C3

後発隊 (片山、師田、田中、山本、島谷、中村、水谷、石渡)

C2から肩まではズクズクの雪。肩からはクラスト。笠からの下りは一部ラッセルの他、快適なクラスト。C3は播隆平と抜戸岳の間の台地

12月27日 晴 C3 ~弓折岳~縦沢岳手前のコル C4

撤収後、全員で出発。ずっとトレースがある。アイゼンはよく効くが強風で少し歩きにくい。フィックス地点は雪が柔らかい急な斜面。C4は縦沢岳南西稜線と双六小屋への夏道の出合いのコル。

12月28日 雪強風 沈殿

12月29日 地吹雪

昨夜からの風は強く、9時の天気予報まで待機。ただし、上級生はデポ、ルート工作に行く。気圧配置は冬型となり10時頃から雪も強く降り出す。結局沈殿となる。

12月30日 雪 沈殿

12月31日 地吹雪 沈殿

1月1日 雪のち曇 C4 ~西鎌尾根~槍ヶ岳~中崎尾根ジャンクション C5

C4をやっと撤収し出発。沈殿明けの1ピッチがこたえた。風は強くなってきたが縦沢岳あたりからかすかに陽がさし始めた。西鎌では強風に吹き上げられスノーダストが美しかった。フィックスは二ヶ所 (硫黄乗越すぐ先の岩コブ、右にまく。千丈沢乗越100m手前、右にまく) で短い。千丈沢乗越に着いたのが早かったので、槍ヶ岳にアタックをかける。このときも先発隊メンバー (片山、師田、田中、島谷) が穂先にフィックスをする。初詣の人で混雑するなかを全員登頂。当初の目的を達成する。山頂は雲海の上、紺碧の空の下にあった。

1月2日 雪のち曇 C5 ~中崎尾根~新穂高

昨日の夕焼けで天候回復かと思わせたが、朝から曇り空。中崎の鼻までは上がったたり下ったりで高度差は余り無い。鼻から樹林帯のつづら折れを一気に600m下る。ずっと夏道どおしにトレースがあり、長いだけの尾根だった。



● ブナの芽生え